

「差別」につながる言葉

筑紫野中学校三年 笹口 大琥

「おれ、ニガー。」

真っ黒に日焼けした腕を見て、ふざけて口にした言葉に、兄の表情は曇った。普段は穏やかな兄が落ち着いた声で、はっきりと言った。

「今の言葉、もう二度と使うなよ。」

びっくりした僕は、思わず言い訳をした。

「冗談って。ふざけただけやし、悪気はない。」

しかし兄は、真剣な表情で首を横に振る。

「冗談でもダメ、悪気がなかったから許されるわけじゃない。」

兄はオーストラリアに留学しているが、一時帰国中だったこの夏は、ぼくの中学野球最後の中体連と重なっていた。何度も夜の自主練習に付き合ってもらった。特

にあれこれ会話があるわけではないが、ぼくはあの時間が大好きで、とても集中で
きた。注意を受けた出来事は、ちょうど練習を終えた後の出来事だった。

兄は、オーストラリアで経験してきた事を、自分からいろいろ話してくれるタイ
プではない。しかし、「差別」については敏感で、普段から時に詳しく話してくれ
ていた。異国での生活は、文化や宗教、肌の色が異なる人々に出会い生活する中で
は戸惑いだらけだったそうだが、お互いを認め合って生活する事の大切さを学んだ
反面、実は差別がとてもあるということを知ったという。ある日の話、現地の人と
思われる見ず知らずの若者が、目尻を伸ばすジェスチャーをしながら、「イエロー
モンキー」と言ってからかってきたそうで、とてもムカついたと、話してくれた。

兄は、自分が体験した事を通して、言葉の持つ力は時として、暴力的で人を傷つ
ける事があるということを伝えてくれた。

「差別って、怒鳴り口調じゃなくても、笑いながらも生まれるし、悪気のない

軽さのほうが、むしろ残酷だったりするよね。」ふと練習で真っ黒にやけた肌を差別的な言葉でからかわれたらどう思うか、想像してみた。真剣に頑張った時間を軽く扱われたとしたら、それは許せない。兄の伝えたかった事の意味は、こういう事なんだという事に気づいた。

「負ければ引退」という試合を何度も乗り越え、結果的に「最後」となった引退試合は兄が再びオーストラリアに飛び立つ日と重なってしまった。

帰宅後、兄からLINEメッセージが届いていた。「試合、観たかったなあ。」
「お疲れ様、よく頑張ったね。」短い言葉だったか、僕はとても嬉しかった。

言葉には、人を守る力があれば、時に凶器となりうる暴力的な力をもつ側面もある。異国の文化や宗教や人種など、その異なるもの全てを理解し、生活をしている兄から学んだ事とは、簡単に解決しそうで、実はとても難しい「差別」という問題に気づくきっかけになった。

「吐いた言葉は戻らない。」

これからぼくは、発する言葉に、もっと責任が持てる人間になりたいと思う。

※ニガーとは、おもに英語圏において、

一般に黒人をさす差別語として使われてきた言葉